

## 「有機的」と「有機体的」 —コミュニティ論の基礎視角—

‘Organism’ and ‘Organicism’  
— A Fundamental Perspective of Community Theory —

橋 本 和 幸\*

### 要旨

Beck discriminates the individualization and individuation in sociological and historical meanings. Certainly, we have been understanding complex and varied way of their behaviors and thoughts. These two words have much to do the today’s interpretations of hope for human-solidarity in late Comte-Weber. I hope the second enlightenment in civilized worlds.

キーワード：Community (地域共同社会) / Organism (有機的) / Organicism (有機体的)

### I コミュニティ論の今日的理解

私は、21世紀への転回期以降、社会学の基礎理論であり、その意味で連辞符社会学の通奏低音部に位置するコミュニティ論の新たな構築に関心を寄せ続けている。その試みの出発点としては、20世紀への転回期に、コミュニティ概念の政治利用を潔しとしなかったテンニエス (Tönnies, F.) に触れた小品 (『ソシオロジ』第37巻2号、1992) と戦前の金沢市での善隣館創設に関わったリーダー層のエートスを取り上げた「コミュニティ形成のエートス」 (『日本の科学者』6月号、2000) を挙げることが出来よう。また、前任のノートルダム清心女子大学時代に、エヴァルド (Ewald, F.) の貧困の社会化と連帯パラダイムに依拠しつつ、岡山の済世顧問の活動に触れた「明治末～昭和戦前期に見るコミュニティ形成のエートス—Ewaldの連帯パラダイムとの関連で—」)、さらにコミュニティ論の歴史に色濃く残っている「素朴」有機体的・集団論的傾向への批判及び重

層的理解の必要を指摘すべく、『コミュニティの理論と実際』(2008)を公にもした。最近では、「コミュニティ論の新たな方向を目指して—隣人・贈与・互酬性—」で、また金沢大学大学院人間社会研究科経済学専攻主催のシリーズ講演会『学際総合の方法』での報告「コミュニケーション (論) とコミュニティ (論) —現代社会論的視角」(2013年3月28日)で、この試みの基礎作業を行ってきている。

日本でのコミュニティに関する研究は、地域コミュニティ研究として、時代制約的 (戦後での新産業都市や全国総合開発の計画、過疎と過密、グローバル化など) に、また地域固有にも展開がなされてきており、その蓄積は膨大である。現象学的方法の利用、家族・地域・福祉など特定対象領域でのオーソドックスな調査研究等、量的・質的調査が多方面で実施され、成果も結実してきている。

一方、特に人文・社会科学においては、普遍性 (共通性) と特殊性 (個別性) の視点が、学問研究の潜在的に自明の理であることを思う時、個別コミュニティの調査研究の発表にとどまらず、コミュニティ研究を現代社会論の遡上で検討するこ

---

\* HASHIMOTO, Kazuyuki  
北陸学院大学 人間総合学部 社会学科  
社会学概論

とで、社会学の基礎的地平が一層広がっていくものと考えられる。

さて、ベック(Beck,U.)流の概念に従って、コミュニティの概念の登場の背景がfirst modernityにおいてとすれば、second modernityと彼が呼ぶ現代社会では、コミュニティは如何様に把握しうるのであろうか。山崎正和の「柔らかな個人主義」流に、『『私』時代のコミュニティ』とでも言えようか。いま、少し粗雑な作業ではあるが、前近代社会での「公」重視(nobody)、近代の生産型社会での成就志向の平等型個人(anybody)に対して、現代消費・情報型社会では、差異志向の多様な個人(somebody)の出現が、顕著になっていると指摘することも出来よう。大まかな整理ではあるが、幾つかの特性に注目して諸点を列挙しうるとすれば、①閉鎖性(homogeneity)から開放性(heterogeneity)へ、②単線型(linear system)から複雑型(non-linear system)へ、③決定論(vertical)から相互浸透(interpenetration)へ、④personalな人間関係から、non-personalな制度を経て多様な差別的関係(complex,different relations)を挙げることが出来よう。①はコミュニティの外部世界との関係で、②はコミュニティ内の支配的価値の面で、③はコミュニティ内での意思決定に関して、④はコミュニティ内での諸関係の型の変容について、整理できる。このように整理すれば、ベックが、コミュニティの構成員のindividualizationとは別に、individuationを「わざわざ」用意するのも、十分に頷けるところである。既に古く、パーソンズ(Parsons,T.)がパターン・ヴァライアブルズで、業績主義(achievement)と所属主義(ascription)、普遍主義(universalism)と個別主義(particularism)を析出した時、ベックのbecoming-individual(being-individualとは異なり)の登場を予測しえたと考えてよい。それは、普遍主義と所属(帰属)主義から構成されるものである。

同様のことは、例えば住谷一彦の「死の無意味化」と「生の無意味化」を通じての「人間的生の再意味化」というポスト・近代(=現代)になって登場してくる課題に着手しようとするウェーバー(Weber,M.)への言及(『マックス＝ウェーバ

ー』)、また、第一次世界大戦による大量の死を通じて、「生と死の意味をもう一度考えざるをえなくなった」ウェーバーの思想的経緯を、「トルストイに代表されるような『絶対倫理』あるいは『愛の無差別主義』から把握し、「神との関係のみから生じる孤独な個人」を主張するカルヴィニズムでなく、「同胞への愛」即ち「同胞倫理」に基づく原始キリスト教への回帰を重視する晩年のウェーバーに関心を寄せる内藤葉子(「マックス・ウェーバーにおける国家観の変化」(一)(二)、『大阪市立大学法學雑誌』47(1・2)、2000)の指摘にも注目してよい。

## Ⅱ 後期コントのテーマー有機的組織から有機体的組織へ

社会学の祖と言われるコント(Comte,A.)の社会学が、彼の後半期において実証主義と社会有機体説をその根底に置いていたことは周知のところであろう。というよりも、実証主義的有機体説といった方が、コントの場合適切かとも思う。実証主義と社会有機体説が結びつくかどうかは、ここでは問わないとして、彼が実証的(positif)と言う時、それは、相対的(relatif)、現実的(reel)、有効な(utile)、確実な(certain)、精密な(precis)そして有機体的(organique)といった内容を含むものと解される。organiqueは、単に有機的關係といった事物の状態を指すもの以上に、かくて全体と部分との構成概念ではなくて、「一切のものが、究極的には人類という十分に普遍的な唯一の概念に関係する」(『実証哲学』石川三四郎訳)ものなのである。このような理解は、コントが国王の側と人民の側を共に誤謬とした初期の「理論の実践からの分離」や「秩序と進歩」といった社会再組織のスローガンの意味するところと、まったくと言っていいほどに異なっている。1789年のフランス革命と人権宣言、1792年の王政の廃止と第一共和制の成立、1799年のナポレオン・ボナパルトの登場と1804年の皇帝即位そして1814年の退位およびウィーン会議と復古王政、さらには1830年の7月王政そして1848年の2月革命へと続く、こうした急激な展開の中で、コントが『社会再組織に必要な科学的作業案』(作業案)を公にしたのは1822年(1824年に若干の修

正) で、国王の側と人民の側との両派の誤謬は「有機体的学説」を採用することで克服可能になるとした。周知の「瓦解の運動」と「再組織の運動」の整理を通じての「新社会組織の成熟」が、「批判的方向を捨て、有機体的方向を採る」ことで可能となる、とコントは言う。現代社会論との関連で、ここで注目しておきたいのは、先に述べた18世紀後半から19世紀前半にかけての政治・社会変動が、コントの時代においては、「実践（批判）でなく、理論（有機体学説）の確立」こそ緊急の課題であり、そうすることで、社会の再組織が可能と考えられていたが、ウェーバーの時代では理論の領域であれ実践の領域であれもはや修復不可能な矛盾態として出現し、現代においては従来の近代化のプロセスとは異次元の地平で、非矛盾態のテーマが私たちに迫ってくることになる。この点は、今日の現代社会論が検討を求められている黄金律と関係する。このことは、コントの以下の主張からも明らかである。20世紀の転換点がいかなる時代であったか、明白である。

第三の時代〔実証的段階－筆者〕は科学的な産業的時代である。（中略）産業は優勢となった。（中略）つまり生産を唯一の恒常的な活動の目的とするにいたったのである。この最後の時代は、部分的にはすでに到達され、全体的には正に開始されようとしているのである。その直接の出発点は、アラビア人による欧州への実証科学の輸入及び都市の独立、即ち大体第十一世紀を起点としている。（『作業案』、訳書108頁）

コントのテーマに戻ろう。彼が「人民の誤謬は国王の誤謬以上に根絶しなければならないものである」と言う時、彼は人民の誤謬として、信仰の無制限な自由、個人理性の主権、人民主権の教理などを挙げ、これらは批判的学説で闘争の武器であり、社会を「確定的な無政府状態」へと導く、と言う。この『作業案』は、実践を拒否し理論の構築を主眼に置くものであるが、その「理論」は、「あらゆる種類の社会現象は、その本性上、同時にまた相互の作用の下に発展するものである。従って、豫め全体の発展を一般的に観念しない限り、それ等の各々のたどった発展を理解することは、絶対に不可能である」（飛澤謙一訳）。全体の

優位と部分の貢献という有機的理解が、ここに示されている。

『作業案』で、新社会組織の建設は、適当に観念されるだけでは不十分であり、社会大衆がそれに熱中することが大切で、「内在的なかの感激の道徳的要求が満足される」必要がある、と述べる。この言い回しは、現代社会学ではゴッフマン（Goffman,E.）のコミットメントとアタッチメントの区別、そしてアタッチメントの優位と類似する。コントの59年の短い人生の中で、後半期は理論以上に実践のテーマが関心事となってくる。初期の社会静学と社会動学の区別、前者を秩序に後者を進歩に見て、「進歩は目的であるが、秩序が基礎」との主張は、後半期では、「愛を原理とし、秩序を基礎とし、進歩を目的とする」に変化し、宗教的実践の課題が前面に登場する。コントの理論は前期と後期に区分して説明される場合もあるが、前期が実践よりも理論に強く傾斜しているとは言え、彼の実証主義の意味するところは、かなりの程度一貫していると言える。但し、よく指摘されるように、1842年の妻との離別そしてクロティルド・ド・ヴォー夫人との恋愛事件とその結末は、「病理的段階での産物」（リトレ＝Littre,E）かどうかはともかく、コント教の祭司としての「愛の祈り」（amoureuse priere）の実践であり、先の「愛を原理とし・・・」のテーマを招来することとなる。

私は、『実証精神論』における「実証精神は、直接に社会的である」の主張に注目する。

実証精神にとっては、いわゆる人間は存在せず、ただ人類だけが存在しうるにすぎない。・・・「社会」という概念が、いまなおわれわれの知性の抽象であるように見えるのは、とくに古い哲学組織の故である。なぜなら、このような特徴は、少なくとも人類においては、確かに、「個人」という観念にぞくするからである。しかるに、新たな哲学の全体は、実際生活においても、また思索生活においても、各人が万人と多くの種々の面で結合していることを、常に明らかにし、こうして、あらゆる時代とあらゆる場合に適当に拡大されうるような、社会連帯の深い感情をば、しらずしらずのうちに、通俗化するにいたるであろう。



したがって、個人は、もはや人類としてしか自己を存続させることができないから、かれはできるだけ完全に人類のなかにとけ込んだ上、単に現在だけでなく、さらに過去の、そしてとくに未来の人類の集合生活の全体と深く結びつき・・・

コントのこのような主張は、「近代」においては極めて保守的に理解されるのが一般的だと思われるが、「現代」に照射してみる時、鮮やかな光彩を放っている。ベックがindividualizationとindividuationを識別し、前者にanomic individualismを特質とするneoliberal idea of the free-market individualを適用し、institutionalized individualismを後者に妥当とするのも、それと同様の内容は、既にコントによって明らかにされているところである。「部分」の自律的で創発的な活動こそが、「全体」の機能を維持しようとする、今日の有機体的展開がここにある。

実に、トルストイ的な愛の無差別主義や神秘主義に傾斜していく晩年のウェーバー（近代の生・死の意味の喪失）の実存的姿勢は、彼をペシミストとする以上に、「現代」からの照射の陰翳と映る。ウェーバーの指摘する現代社会論が、今思うに「矛盾態」でしかなかった（暗鬱と憔悴の時代）とすれば、今日の現代社会論は、その「矛盾態」を新たな地平で解明し、新たに社会関係を構築していく以外に道はない。このような方向性は、ウェーバーと同時代の多くの社会学者に共通するものであった。例えば、テンニエスが、その時代を「観念的機械的な形成体」とし、「実在的有機的な生命体」の疎外態とみたのも、また、デュルケーム（Durkheim,É.）がアノミー状態としてその「現代」を素描したのも、先鋭な社会学者の時代観であった。実際、『ゲマインシャフトのルネッサンス？』（*Renaissance der Gemeinschaft?* 1990）では、シュルター（Schulter,C.）とクラウセン（Clausen,L.）は、モダン及びポスト・モダンの断絶のテーマに関連させて、ペシミスト・テンニエスの姿を浮かび上がらせている。この点について、私は、以前次のように語った。

無限背信（有限前進ではない！）の永劫回帰でもなく、またこのわれわれなる世界から未来へ向かって飛び出すことでもなく、この時代に踏みとどまろうとす

ることを義とするなら、ゲマインシャフトは古く、ゲゼルシャフトは新しい、とは違った地平で、ゲゼルシャフトの内にあるゲマインシャフト（ゲマインシャフト概念からのゲゼルシャフト批判）に注目するのも、今日おおいに意義のあるところと考えられる。（「ルネッサンス？」『ソシオロジ』第37巻2号1992）

ビッケル（Bickel,C.）もまた、「テンニエスは、彼の概念の批判的・理性的意図にも拘らずワイマール期のロマン主義化された、ネオ保守主義的潮流に最後まで抗することはできなかった」と述べ、ドイツのこの時期の経験的個別科学としての社会学の展開を、社会的ペシミズム（Sozialpessimismus）として特徴づけている。先の矛盾態であれ、社会的ペシミズムであれ、その内部においてしか次へと進む展望は開けない。

かくて近代において有機的学説は保守的・懐古的であったが、現代において有機体的学説は、時代の継続性、類的個人の再生産、そして新たな社会関係の意味創出を説明するための、最適な指針となる。だから、後期コントへの関心の深まりも、「この時代」の必然と考えてよい。この点に関しては、拙稿「コミュニティ論の新たな方向を目指して—隣人・贈与・互酬性—」を参照されたい。蛇足になるが、有機的学説と有機体的学説（有機体論）は、英訳すれば、（Longman:Dictionary of the English languageによる）organismとorganicismになる。前者は、下位にあって従属的な相互依存関係にある諸要素の複合組織（a complex structure of interdependent and subordinate elements）で、後者は、諸要素というよりは生命活動する諸器官の組織体がまさに生命そのものを構成していることを明らかにする理論である（a theory that the organization of a living organism rather than its components constitutes life）。かくて、前者は有機的組織についての理論であるのに対して、後者は有機体に関する理論と言える。既に触れたように、21世紀の転回期になって、近代社会の生成とともに存立可能であった「社会と個人」（ego—other）の二者関係的構成は、個人の多様な生き方等を主張・呈示する可能性の増大によって、「自己—他者そして類」（ego—other—humanity）という三者関係的構成に道を譲るこ

とになった。

### Ⅲ 「矛盾態」の克服の方向と現代社会

ベックは、ヨーロッパ社会での資本主義の成熟期、アメリカ社会での農業型から産業資本主義型への移行期、即ち19世紀から20世紀への転回期を第一次モダニティと呼び、1970年代後半から21世紀への転回期を第二次モダニティとしている。モダニティのこのような区分は、社会の一般的な背景説明では、産業資本主義社会と消費情報社会となる。先にベックの Being-individual と Becoming-individual の時代的差異についてふれたが、山崎正和の nobody、somebody、anybody であってもよいが、コミュニティを構成する人的要素は、この二つの時代で異なって説明される。コミュニティを考える時の幾つかの特性については、既に本稿のⅠの①～④で記述した通りであるが、人的要素即ちコミュニケーションの側面から考察することが、とりわけ今日肝要になってきている。実際、コミュニティの社会学的研究にあつては、コミュニティの変容についての論究は今尚意図的に追及されてきており、社会変動論や地域社会論の第一次の関心事ではあるが、コミュニティ内外でのコミュニケーションの実際の変容等については、十分な展開がなされているとは言えない。換言すれば、社会関係の分析を通じて可能となる相互行為（コミュニケーション）が、先のベックにみる individualization と individuation の識別を素通りして、常に変化しない一定のものとして説明されている。私が、現代社会論的視座の重要性を力説するのも、かかる現状ゆえである。先に指摘したように、近代社会特有の「社会と個人」的発想が今尚生き永らえているかのようなのであるが、こうした発想は、早く脱却されねばならない。ということで、コミュニケーションの次元で現代社会を考えてみるに、「ego-other」の二者関係的理解は捨て去ることにしよう。

かくて、コミュニティ論も古典的段階（それはそれとして貴重な学的展開をしてきてはいるが）から、現代社会におけるコミュニケーションのテーマ（役割論から行為論へ）へと進めて

いく必要があると思われる。そして、日常的コミュニケーションの場としてのコミュニティを検討素材とすると、コミュニティ論の展開は、今日、豊富な蓄積をなしてきている。ミード（Mead, G.H.）に始まる社会行動主義派の仕事は当然のこととして、パーソンズら（Parsons, T. Renee, C.F. Lidz, V.M.）の「生命の贈与と互酬性」、ボールドリング（Boulding, K.）の「贈与の経済」、ポランニー（Polanyi, K.）の「非市場社会」、ロールズ（Rawls, J.）の「行動の徳性としての、人々の徳性としての正義」さらにはパットナム（Putnam, D.R.）の「社会関係資本」など、これらの主題は、いずれも「媒体」に関するものである。そして、この「媒体」は、個別的な義理規範というよりは、普遍的な義務規範と呼んでよい。上野千鶴子は、「贈与交換と文化変容」で、「交換（経済的交換）は、・・・（複数組の一筆者）個人や集団と、双方のあいだを移転する財からなる。・・・それに対して贈与交換（社会的交換）は、AとBが与える、受け取る、返すという、人格的行為をおこなう形態である」として、非人格的行為である前者と区別しつつ、「贈与と返礼に用いられる財のほとんどが、市場で取引される商品によって占められている」と指摘する。この点は、既にボウルディングが、「一方では贈与は、統合的な関係および統合システムの産物である。他方では、脅迫および脅迫システムの産物でもある」として、贈与の経済と交換の経済との「複雑な関係の網の目」を実証しており、筆者のここでの主張と同様である。私が有機的關係でなく有機体的關係の緊急性を重視するのも、これらの指摘と軌を一にする。

「矛盾態」の克服のテーマに戻そう。「媒体を契機とする三者関係」というとき、私は、自律的個人を前提とする近代的社会関係が実は媒体によって拘束された「半自律」的個人からなる社会関係でしかない、ということを言っている。拙論「コミュニティ論の新たな方向を目指してー隣人・贈与・互酬性ー」で、コミュニティ抽出の四パターンを例示し、④のリベラルコミュニティアニズムで示される社会的個人に、私は

表 コミュニティー抽出の四パターン

		媒体との関係	
		断絶性	連続性
互 酬 性	個 別 性	①	②
	普 遍 性	③	④

「半自律」的個人をみている。

上記の作表は、ひとつは、近代社会論の成果であるエゴ (ego) を相対化させることで、自省のエゴの存在が可能となり、近代社会では二者関係を前提にしてのみ存在し得ると思われたコミュニケーションが、実は「媒体」の拘束の下に置かれている、という事実認識から出発している。ふたつは、現代社会でのコミュニケーションは、ハーバースのコミュニケーション的行為で明確になったように、分業関係の中での単なる交換行為ではなく、分業関係から必然する(倫理的)互酬的行為だということである。この点については、私は、臓器移植にみる互酬関係に関するパーソンズらの論文で明らかにした。

さて、「矛盾態」の克服作業に取りかかるとして、ひとつは、ベックの近代化論の検討であり、ふたつは、「有機的」と「有機体的」の識別に関して、社会学研究者はどれほど敏感であったか、という「社会学的想像力」(批判的反省)に関連する。

ベックについては先に簡単に触れたが、1990年のドイツ社会学会大会の統一テーマ「近代化の近代化」(modernization of modernization)の下で、ベックのreflexive modernizationに関して諸報告がなされた。ベックは、20世紀後半以降流行概念のポスト(post)に替わって、past plus postを提案し、「過去と断絶した近代」でなく、過去との連続性のもとで近代を理解する必要を主張する。

19世紀に封建的な社会構造を分解し、産業社会を生み出したように、今日、近代化は産業社会を分解し、いまひとつの新たな近代社会が生まれようとしている。

ベックは、pre-modernity、simple(first)-modernity、reflexive(second)-modernityの周知の三つの段階を想定し、preからsimpleにいたる第一のプロセスでは「産業社会の道程」次元での近代化が、simpleからreflexiveにいたる第二のプロセスにおいて「産業社会の原理」そのものの近代化(原理の取り換え)が、テーマになると言う。一般化して述べれば、近代社会になって主体として登場した個人(being-individual)が、実は「分割された、分離された」(divided)状態(in)にあり、外化即ち疎外化された分離の関係のもとに置かれているという「産業社会の原理」を、「分割された、分離された」状態をいまひとつたび統合し結合していく(in)方向へと取り換える(becoming-individual)ことの緊急性を、ベックは指摘する。この点は、マルクス(Marx,K)が『経済学・哲学草稿』で「人間の類的存在(類的生活、類的意識)」という基本的性格を理解しつつ、外的自然、人間および自己自身からの外化を強調するのと、基底において相通ずる。(勿論、ベックがハーバースを批判する根拠である、近代資本主義社会観の問題は、マルクスに対する場合にも当てはまるが。)かくて、マルクスにあっては、「感性的」外界、「感性的」自然との類的な有機体的関係を獲得することで、人は「自由な意識的活動」を行う実体となるのである。

ベックの第一の近代化との関連で、見田宗介の興味ある指摘がある。彼は、『社会学入門』(2006)で、一般に近代化の刻印とされるEntzauberungが非人格的な合理主義(脱魔術化)を特徴づけるとされるのに対して、Zauberすなわち「人を引き付ける魅力・魔力」をEntすなわち「喪失する」という価値次元での問題、換言すれば「喪われたものの取り戻し」という第二の近代化のテーマこそ、Entzauberungに読み取る必要がある、と言う。この点は、晩年のウェーバーに関わる事柄として先に触れた。同様に、テンニエスもまた20世紀初頭、ゲノッセンシャフト的精神(genossenschaftliche Geist)である「気高い同胞性という理想主義的な動向」が当時現れてきていることを強調している(Einführung in die Soziologie,1931)。

ベックは、先に述べたように第一次啓蒙(Being-



individual) 段階での個人化を individualization、第二次啓蒙 (Becoming-individual) 段階でのそれを individuation と呼ぶ。前者での個人は、確定した諸制度のもとで、権利と義務の集積した役割行為に従事し、個人化はしばしば anomic な事態を生じさせるが、後者での個人は、確定した諸制度の存続根拠が揺らいでおり、それゆえに不確定な制度のもとで不安定な行為 (差異的行為) を通じて自己のアイデンティティを求めて、auto-nomic な存在となっている。彼は、メルッチ (Melucci, A) に倣い、nomadic なる語をよく用いるが、それは、規制化しうるカオス状況を指し、個人は、socially sensitive で、altruistic individualism ないし co-operative individualism の自律者として振舞う。かつて、役割は、「社会的」役割として確固とした (determinate) 規準のもとに定められていたが、今日、個々人が自ら役割を相対化し問い返すことで、新たに役割「関係」を制度化していこうとする。

このような方向性は、本稿の初めにも述べたように、パーソンズの類型に従えば personal、particular、affective といった前近代社会に特有の関係パターンに類似するかのようである。しかし、それは、本質意志に基づくゲマインシャフトや類似に基づく機械的連帯とは違って、impersonal、universal、inaffective な関係を前提とする選択意志に基づくゲゼルシャフトや分業に基づく有機的連帯の段階 (第一次啓蒙) の中で、アノミックな社会関係や「意味の喪失」の発生による矛盾態 (分裂態) を克服する (第二次啓蒙) 動向として、注目する必要がある。

#### IV 「有機的」と「有機体的」

例えば、有機的連帯 (organic solidarity) と言えば、デュルケームのそれを直ちに思い出すが、本稿でのこれまでの流れから言えば、デュルケームの言う organique は、「有機的」よりは「有機体的」とする方が、現代社会論的には相応しい。ベノワ-スミリヤン (Beneit-Smullyan, E) は、『デュルケームの社会学主義と学派』(*The Sociologism of Émile Durkheim and His School*) の中で、アジェリシズム (agelicism) なる造語を用意している。それは、フランス社会思想の主要

な流れで、何よりも社会集団の個人に対する優越を主張するものとされる。彼は、デュルケームをこの立場に置いている。先にも触れたが、ロングマン英語辞書 (*Longman Dictionary of the English Language*) では、organism を「相互に依存しあう下位にある諸要素の複合的構造であって、諸要素間の関係や特性は大体、全体におけるその機能によって決定される」とし、organicism を「生命ある organism であって、生命を構成する諸部分以上のものである」としている。この辞書的意味に従えば、デュルケームの organique は、organicism に相応しく、凡そ agelicism ではない。このように、デュルケームの類似に基づく環節型の連帯＝機械的連帯は「有機的連帯」であり、分業に基づく異質型の連帯は「有機体的連帯」とよんだ方が、現代社会論のレベルではより適切であろう。実際、ライツたちは、デュルケームの『社会分業論』の後半では、有機的連帯が機械的連帯を補完・拡大するものとされており、前半部分での二つの連帯の代替説とは異なることを指摘している。

デュルケームは『社会分業論』第二版序文で、次のように語っている。

人々が規則の権威と個人の自由との間に極めてしばしば矛盾をみようとすることはほど誤れるものはない。それどころか、自由そのものは規則 (規制) の産物である。

周知の通り、デュルケームの場合、原始社会と文明社会の差異は、道徳的ないし社会的連帯の類型の差異にある。前者では、分業は未発達で、諸個人は比較的同質的である。後者では、分業は分化した諸機能の能率を高めるということだけでなく、彼の関心は、分業が社会の統合を可能にする点にあり、道徳的特性を持っているところにある。この道徳的特性の可視的シンボルは法律であり、禁止的制裁を特徴とする法律 (例えば刑法) の場合、集団の意志や感情を傷つけ害する者を罰し、集団の道徳的再統合を図る。あくまで、集団の均衡が第一義となる。文明社会に妥当する現状回復的制裁を特徴とする法律 (民法、商法) では、それぞれ異なった人格、機能等を有している個人が前提

であり、彼らは、相互的連帯によって結合する。ここでは、個人が不当に剥奪されたものを個人当事者に戻し、現状を回復することが主要であり、個人主義が一般的な道徳になる。

ここでは、彼が論敵としたスペンサーらの功利主義（これ自体近代の分裂態にすぎない）批判には触れないが、スペンサーらの契約（関係）の主体としての個人（主義）とは違って、ライツらに言わせれば、差異性と専門性を特性とする分業による個人主義は、「個人が自分の欲望を追求するのに、無制限な権利を要求するのではなく、むしろ、社会の一般的な福祉に自分なりの貢献をするために、専門化によって、自己を個性化すべく課せられた義務に他ならない」。個人主義が一般的な道徳である、とのデュルケームの理解は、既にベックが指摘する anomic な個人主義や欲望快楽的個人主義ではなくて、auto-nomic な個人主義ということになる。現代社会論との接点が、ライツらの指摘するごとく20世紀の転回期に、すでに見られていたのである。

ヘルライン（Herlyn,U.）は、現代社会における生活スタイルの多様化（Pluralisierung）と差異化（Differenzierung）は生活過程での個人化のコンテクストの中で生じてくる、と言う。個人化は、もはや今日では新しい社会的現実ですらなくなっているが、彼に言わせれば、個人化は社会化の様式（Modus der Vergesellschaftung）、換言すれば「制度」になっているところに、「新しさ」がある。例えば、彼は、語る。

人間の生涯は、あらかじめ確立している所与の構造から解放されて、開放的で選択的になってきている。だから、自己の一生は、自分で決めることが可能である。家族を例にすれば、人は結婚するのか、いつ結婚するのか、同居するか、同居しても結婚はしないのか、結婚しても同居しないのか、子どもを産むのか産まないのか、これらは、個人にかかわる事柄である。

制度としての生活過程という場合、一方では、生活の持続的プロセス（構造によって規定された持続態という意味で）が規制化されていることであり、他方では、[構造でなく個人の一筆者]生活世界の領域が、構造化されていることでもある。この生活世界にあって

は、個人は自分自身で指向し、また行為を企図するのも可能である。

本稿では、「現代社会におけるコミュニティ」のテーマを、その担い手である「個人の問題」として、すなわち「現代社会での個人化の態様」のテーマとして考究してきた。冒頭でも触れたように、今日のコミュニティ研究の方向とは少しズレてると思われる。但し、私は、このズレの生じる溝を埋める作業こそ、現代社会学の今日喫緊の課題だと考えている。素朴な視点では、コミュニティについてのモノグラフ等が、今日住民たちに求められている地域住民による協働型コミュニティの形成等に如何に関連しているのかが曖昧なままに、展開されているのではないか、という私の社会学的反省がある。住民たちが望んでいる方向（改革でもよい）とは別のところで、私的営為を試みていたのではないか。金沢や岡山での当時の社会改良にかかわった人々のエートスが今日ますます重要な意義をもってきていることへの関心、「隣人・贈与・互酬性」に関する最近の小論を通じて、伝統的・感情的行為の代替的社会化の可能性の吟味、これらのささやかな作業も、コミュニティの担い手側の日常行為が脱日常的行為へと転化し、新たな社会関係が出現する契機になりうるチャンスがあるのでは、との思いからである。

## V 社会学的反省と「個人化のポテンシャル」

少し整理しておこう。私がここで指摘している諸点は、マーフィー（Murphy,R.）がウェーバーの合理化分析を試みた際の思考方向と重なる。マーフィーは、社会的行為と自然過程との関係を考察する際、まず、ウェーバーの思考の背景にある、いくつかの制度的要因を挙げる。①科学・技術の発展によって、自然を理解し操作するための、計算可能で組織的な手段の拡大がもたらされる。即ち、主知的世界像の出現である。自然や人間の支配は、科学・技術によって可能であり、この点が、主知的世界像と合理化の重要な要素となる。②伝統や感情などから解放されて、市場の機会を自己の利害に基づいて計算しつつ追求できるという点で、資本主義的市場経済は形式的に合理的である。③社会的行為を合理的に組織化された行為に



変換させる手段として、形式的でヒエラルヒー的組織が重要となる。ここから、合理的な組織的権威関係が生まれてくる。④社会的紛争を処理し、社会的行為の予測性と計算可能性とを高めるために、フォーマルな法のシステムを維持していくことも、合理化の構成因である。

これらは、ウェーバー理解にとっては当然すぎる、自明的な整理であるが、マーフィーは、制度的、社会的レベルでの二つの合理性（形式合理性と実質合理性）及び文化的、個人的レベルでの二つの合理性（目的合理性と価値合理性）が、現代社会にあっては交差しつつアイロニーな緊張にあることを明らかにする。人間が自然を操作する手段を如何に構築するのか、自然が反応する意図せざる結果が如何なるものなのか、こうした問は、「人間による現実の社会的構成」と「自然的現実による人間の構成（破壊）」との弁証法的関係を問うている。そして、この関係の解明は、「西欧の合理化過程に関与し、自然の可塑性とか、（人間と自然）の二元論といったエコロジカルに非合理的な前提を共有してきた」社会学への反省を求める姿勢となる。この立場は、ベックの言う第一次啓蒙（自然の支配、自然の人間化）を反省的に乗り越えていく第二次啓蒙の目指すものであるが、マーフィーに言わせれば、「ベル（Bell,D.）やダーレンドルフ（Dahrendorf,R.）、バーガー（Berger,P.）、Luckmann（Luckmann,T.）らの主流社会学者やマルクス及びマルクス主義者らの中に『自然の人間による利用を進歩とみる』歴史観が見られる」ことになる。

事態は、新たな萌しを見せ始めている。可塑的（plastic）な関係より弾力的（elastic）な関係——elasticというの、社会的行為が自然のプロセスの中に組み込まれている状態を指す——を重視する世界観が登場する。①脳や言語さらに理性といった人間固有の能力の発達、人間と自然環境との関係を一層展開可能なものにする。②外的自然にだけでなく、内的自然にも目覚めた多様な個人が、コード化された権力とは別次元のところ、伝統的な政治的・社会的組織や自助グループ、さらには新しいネットワークに参加して、自分たちの声で語りは始めている。ベックやメルッチ（Melucci,A.）らの「個人化のポテンシャル」

は、システムの限界や矛盾に気づいた様々な個人に見出すことができる。③科学的合理性と社会的合理性との分裂・対立と同時に、両者の結合（統合）もまた重要性を帯びてくる。システム介入の強まりの中で、科学・技術行財政の日常生活世界への浸透によって、システム境界のファジー化と後者の囲い込みが始まっている。とりわけ、「個人化のポテンシャル」の強調は、個人が自己のアイデンティティへの過度の関心と集団のアイデンティティの擁護との調整の段階で、緊張関係を生じさせることもしばしばである。依然として、互酬性のテーマが、ここでも有効である。

私は、本稿でコントにおける「人類及び有機体への関心」、最晩年のウェーバーの「同胞及び愛の無差別主義」、デュルケームの「アルツルイズム」を、ベックやメルッチそしてマーフィーらの現代社会論の共鳴・通底部にあるものとして考察してきた。勿論、19世紀前・中期や20世紀前後の現代社会論が、21世紀前期の現代社会論と何ら変わるところがない、などと暴言を吐くものではない。スパイラルな関係として二つの現代社会論を理解することで、両者は接近する。

例えば、ウェーバーに見る主知化は、一般に人間の生そして外的自然の意味の喪失を結果する、と解される。いま一度精確を期して言えば、今日では、「外的自然の意味の喪失」が、実は「人間と自然の二元論」といったエコロジカルには非合理的な前提の上でのみ言えることで、実際には外的自然にかぎらず内的自然にも目覚めた多様な個人が、コード化された権力とは別次元のところ、伝統的な政治的・社会的組織や自助的・共助的グループ、さらには新しいネットワークに参加して、自分たちの声で語りは始めている。メルッチの「個人化のポテンシャル」は、システムの限界や矛盾に気づいたさまざまな個人に見出すことができる。教育・福祉などの公共的セクター所属者、高学歴で比較的安定した経済生活享受者、学生や失業者さらにはプータロウ、若者、退職者、老人、中流層の主婦など、彼の言う新しい社会運動の担い手など、これらの人々を、メルッチは例に挙げる。従来の集合行動論や資源動員論での登場人物が、「役割の担い手」として同質的な、オルソン流の合理的行為者を前提にしていたが、彼

が主に社会学徒に求めるのは、そうではなくて、多様なネットワークの中で、自律的に多様な活動を実践する行為者たちの、集合的アイデンティティ (collective identity) 形成の試みである。彼は、個々人のアイデンティティを超えて、人間間の連帯の希望を語る。

さて、晩年のコントやウェーバー、そしてデュルケムといった社会学 (的) 思想家の到達点がどの辺りにあったのか、これまでの私の説明で理解して頂けたかと思う。ベックの「個人化」の主張を識るにつけ、「一つの時代がその終焉にあたってもう一度自分の価値を総括してみようとするとき、いつもあらわれて来る人間だった」とのリルケの詩を、想い起こさざるを得ない。

#### <引用・参考文献>

- Beck,U. 1998 “Politics of Risk Society” in *The Politics of Risk Society* (edit.Franklin,J.) .
- 2002 *Individualization*.
- Bickel,C. 1990 “Gemeinschaft” als kritischer Begriff bei *Tönnies in Renaissance der Gemeinschaft?*.
- Boulding,K. 1973 *The Economy of Love and Fear : A Preface to Grants Economics*.  
公文俊平訳 1975 『愛と恐怖の経済—贈与の経済学序説』 佑学社。
- Comte,A. 1933 『実証哲学』 石川三四郎訳 春秋文庫。  
— 1966 「実証精神論」(飛沢謙一訳) 『実証の思想』 河出書房
- Durkheim,E. 1893 *De la division du travail social*. 井伊玄太郎・寿里茂訳 1957 『社会分業論』 理想社。
- Habermas,J. 1981 *Theorie des kommunikativen Handelns*.  
橋本和幸 1992 「ルネッサンス？」『ソシオロジ』第37巻 2号 社会学研究会。  
— 2000 「コミュニティ形成のエートス」『日本の科学者』6月号。  
— 2008 「明治末～昭和戦前期に見るコミュニティ形成のエートス—Ewaldの連帯パラダイムとの関連で—」『ノートルダム清心女子大学紀要』第32巻。  
— 2008 『コミュニティの理論と実際』 大学教育出版。  
— 2012 「コミュニティ論の新たな方向を目指して—隣人・贈与・互酬性」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第5号。
- 2013 「コミュニケーション論とコミュニティ論—現代社会論的視覚」 金沢大学大学院人間社会研究科経済学専攻主催・シリーズ講演会『学際総合の方法』。
- Herlyn,U. 1988 “Individualisierungsprozesse im Lebenslauf und städtische Lebenswelt” *Kölner Zeitschrift für Soziologie. Sonderheft*.
- Marx,K. 1844 *Ökonomische-philosophische Manuskripte*. 城塚登・田中吉六訳 1964 『経済学・哲学草稿』 岩波文庫。
- Melucci,A. 1989 *Nomads of The Present*. 山之内靖他訳  
1997 『現在に生きる遊牧民』 岩波書店。
- 見田宗介 2006 『社会学入門』 岩波書店。
- Murphy,R. 1994 *Rationality & Nature*.
- 内藤葉子 2000 「マックス・ウェーバーにおける国家観の変化 (一) (二)」『大阪市立大学法学雑誌』47 (1・2)。
- Parsons,T., Fox,R. and Lidz,V.  
1972 The “Gift of Life” and Its Reciprocation, in *Social Research* 39(3).
- Patnum,R.D. 1993 *Making Democracy Work : Civic Tradition in Modern Italy*. 河田潤一訳 2001 『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』 NTT出版。  
— 2000 *Bowling Alone : the Collapse and Revival of American Community*. 柴内康文訳 2006 『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房。
- Polanyi,K. 1957 *Trade and Market in the Early Empires*.  
玉野井芳郎他訳 1975 『経済の文明史』 日本経済新聞社。  
— 2010 *Market Society and Human Freedom: Social Philosophy of Karl Polanyi*. 若森みどり他編訳  
2012 『市場社会と人間の自由』 大月書店。
- Rawls,J. 1999 *The Law of Peoples*.  
— 2007 *Lectures on the History of Political Philosophy*. 齋藤純一他訳 2011 『政治哲学史講義』 I・II 岩波書店。

Reitzes,D.C., 1922, “Community Lost: Another Look at Six Classical Theories”, in *Research in Community Sociology*,2.

Schulter,C. Clausen,I. 1990 Anfragen bei > Gemeinschaft< und >Gesellschaft< in *Renaissance der Gemeinschaft?*

住谷一彦他 1987 『マックス＝ヴェーバー』 清水書院

Tönnies,F. 1887 *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 杉之原寿一訳 1957 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』 岩波書店。

Weber,M. 1913 *Einige Kategorien der Verstehenden Soziologie*. 林道義訳 1978 『理解社会学のカテゴリー』 岩波書店。

上野千鶴子 1996 「贈与交換と文化変容」『現代社会学17 贈与と市場の社会学』 岩波講座 岩波書店。

山崎正和 1984 『柔らかい個人主義の誕生』 中公文庫。

※本稿は北陸学院大学及び北陸学院大学短期大学部の「共同研究費」(2013年度)に基づく研究成果の一部である。